はふほどにいもがぬかごはなりにけり、といひたりければ、ほどなく小大進、

今はもりもやとるべかるらむ、とつけたりける、おもしろかりけり、

〔嬉遊笑覽十二附錄〕江州日野近邑山中、例年八月十日野神の祭あり、東西の村より芋を出して長短をくらぶ、是を芋くらべといふ、毎年かくあれば、よく作たてゝ長さ一丈に近き芋ありとぞ、

吾仲

〔風俗文選四說〕山芋說

芋に數種あり、山中に生ずるを山芋と號し、自然生と稱して山藥に用ゆ、畑に植てまろがせとなるを、つくねと呼て、其功もすくなく其味も次也、秦楚には玉延といひ、鄭越には土藷と號す、杜詩囊中の法をこゝろみず、陳簡齋は玉延の賦作る、鐘山の薯蕷は三日炊るれど色を變せず、我國みちのくの芋は、糸を引事藕のごとし、四月に葉を生じ、初秋に子を結ぶ、ぬかごとよばれて座禪豆に入られ、いもが子ははふ程とよみて、叡聞に預る、寒夜の寢酒には、峨眉山の芋をすり込、卯月の麥飯には、まり子の宿のとろゝをうらやむ、世に腎藥ともてはやされど、盆僧の爲には少よろしからず、人參よく人を活し、よく人を殺す類なればとて、樓櫚ばせを植ませて、其勢ひをもどされけるこそおかしけれ、

〔書言字考節用集六生植〕甘藷（ツクネイモ本草）

〔物類稱呼三生植〕佛掌薯つくねいも　東國にてつくねいも、又つくいも、又山のいも、又やまとなどと稱す、關西にても山のいもといひ、又一名うぢいもといふ、奥州仙臺にてはだいしいもと云、津輕にては唐いもと云、土佐にて手いもと云、上野にてみねいもといふ、

今按に山のいもと呼所をゝし、然どもやまのいもは薯蕷にて、東國に長いもといふ是なり、又藥物の山藥は、自然薯蕷を用ゆ、南郭遺契ニ負喧雜錄ヲ引テ、山藥本名薯蕷、避唐代宗諱豫、改名薯藥、避宋英宗諱曙、遂名山藥云云、又つくねいもを山のいもといふは、其形山のごとく、又峯の

薯蕷雜載

佛掌薯